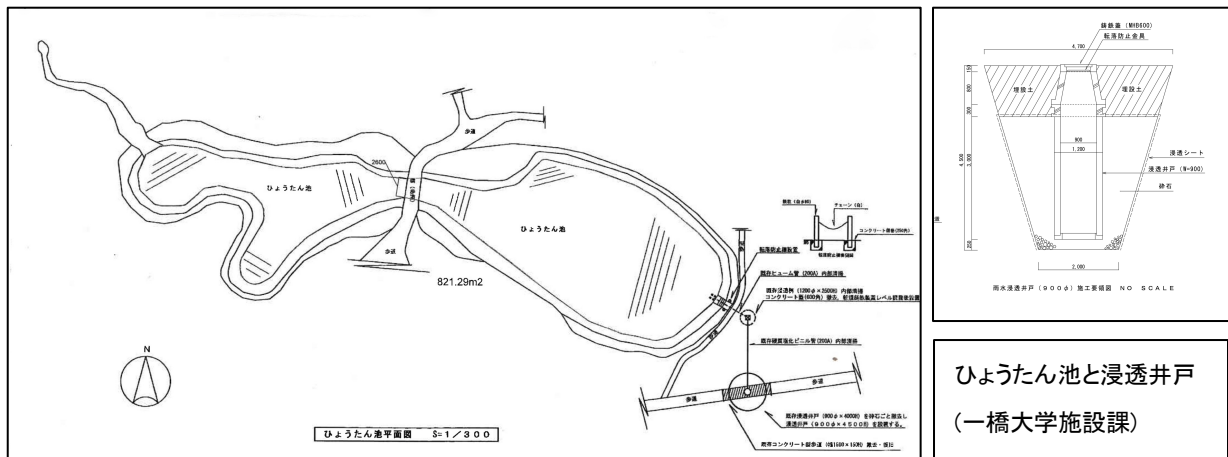


ひょうたん池の清掃作業を終えて

2023年8月21日から25日の5日間にわたって、懸案であった泥溜いを中心としたひょうたん池の清掃作業が行われました。東京都の公園の池や水回りの清掃、整備作業も手がける専門の業者である(株)丸三興業に依頼し、大学とも密に協議をしながら、植樹会発足50周年、新生植樹会の活動開始20周年の節目の事業として実施したものです。作業途中の23日には中野学長、下間副学長をはじめ、大学の関係者の皆様にも作業の様子を視察いただき、丸三興業の責任者の方から池の様子や今後の対応策などについての説明を受けました。

1. ひょうたん池

ひょうたん池は、その名のとおり「ひょうたん」のような形をした池です。磯野研究館と陸上競技場の間、西プラザの西に位置し、東西に長く、周囲を多くの樹木に囲まれ、その面積は約820㎡です。池はコンクリート造りで、西側から東側にかけて三つに区切られ、ひょうたんのくびれにあたる橋のところで大きく分かれ、少しずつ底面が下がる構造になっていて満水になると一つの水面でつながるようになっています。管理上の目的から三つに分けたものであると思われます。



池の水源は雨水を基本とし、増水すると排水口より近くの浸透井戸に流れる仕組みになっています。この浸透井戸は、大きな浸透枡のようなもので、平成21年(2009年)に改修を行ない、内径が90cm、深さ4mに達するもので、周囲に碎石をつめて囲み、大学の建つ立川面の礫層に水が浸透しやすい構造になっています。池の水は少なくなると、当初は井戸から給水していたようですが、現在は水道水を使用する仕組みになっています。水が少なく循環も難しい武蔵野台地上に池を作るに際しての工夫と苦勞の跡をうかがい知ることができます。

東京商科大学は、昭和2年(1927年)4月に商学専門部と商業教員養成所を国立仮校舎に移転、昭和5年(1930年)には全ての主要建物の竣工と移転となり、昭和6年(1931年)5月10日に国立移転式典が挙行されました。池がその時からあったのかどうかは確かめることはできませんが、少なくとも移転後の早い時期には完成し、その後の東京商科大学、そして一橋大学の歴史とともに

歩み、キャンパスの景観を代表する、極めて象徴的な場所であったと思われます。池の面より一段低く作られた陸上競技場の縁の水辺を彷彿とさせる光景、そして今では目にすることができなくなった多摩丘陵の遠景など周囲と一体となった美しい光景が、大学キャンパスを象徴する景観としてひょうたん池を中心に形成されていたものと推察されます。

2. ひょうたん池周辺の整備

このひょうたん池ですが、場所がキャンパス中心部から離れていることもあり管理が行き届かず放置され、周囲の木は生い茂り草も伸び放題という時期が続きました。新生植樹会発足後、ひょうたん池の周囲にも人の手が入り、樹木の剪定や草刈りなど整備作業が行われ、その景観の回復が図られてきました。最近では、本来はなかったと思われる密植されたツバキの間伐、自然発生的に芽を出し成長したミズキなど不要木の除伐、カシヤスダジイ、サワラなどの下枝切り、ササの刈取などを行い池周辺の景観はよりすっきりとして見違えるようになっていました。[写真:周辺整備により明るさを増したひょうたん池(2021年5月)]



3. ひょうたん池清掃作業に至る経緯



池周辺の景観の改善とともに目立ってきたのが、池の中に大量に存在する泥と枯れ枝や枯れ葉、缶やプラスチックなどのゴミです。これらの泥やゴミなどを植樹会の作業を通じ回収しようとする試みは繰返しありましたが、水もあり、なかなか人力だけでは上手くいきません。そこで、良策を求め、ボランティアによるかいぼり作業の成功例として知られる井の頭池の話を東京都西部公園緑地事務所に聞き、対応の検討を始めたのが5年前の平成30年4月でした。そして、7月には大学を交えて池の清掃作業を行うことの検討が開始されます。しかし、諸般の理由から実現しませんでした。

その後、ひょうたん池の清掃は、植樹会の課題として抱えつつ本年に至り、整備が進むひょうたん池周辺と手つかずの池内の現況と対応の必要性を大学と話し、植樹会の支援事業として行う旨を提案、浚った泥の処分場、処分場周辺の安全の確保、浚った泥の臭いの可能性、池内の生物への対応などについて協議を重ねた結果、学内の承認を得て実施されることになりました。今回の作業を委託した(株)丸三興業も5年前に話を



お聞きした東京都西部公園緑地事務所の紹介によるものです。[写真:泥や枯枝が堆積するひょうたん池(2022年3月)]

4. ひょうたん池清掃作業の実際



池の清掃作業は本年2月の状況確認作業に始まり、そこでは4日間で終了できるでしょうとの話しでしたが、夏になり池の水量も増え、また予想していたよりも枯枝やゴミの量も多いことから5日間をフルに使う作業となりました。作業には浚渫泥処分場の掘削を行うユンボ、高圧洗浄器、泥収集運搬用バキュームカー、枯枝等運搬用トラック、水抜き用ポンプなどの機器が持ち込まれ、毎日平均5-6人で作業を行いました。作業は池の水抜き、

泥の収集・廃棄、池の洗浄が主たる作業となりますが、3台持ち込んだバキュームカーは5日間フル稼働でした。池の中には枯枝が多く、これがバキュームカーのホースの中に入ってしまうと故障の原因となることから、枯枝や小石はそれを除きながら泥の吸引を行わなければならない、作業は予定していたより時間を要しました。



最終日には泥処分場は泥で満杯になり、その後植樹会ではその周囲に杭を打ち、ロープを張り、「危険 立入禁止」の表示をして、人が近づかないよう安全措置を講じました。また池の清掃作業終了後の補完作業として池周囲の草やササ、灌木の刈取、樹木の枝の剪定を行いました。泥処分場の水は順調に抜け、予定していた3ヶ月もすればほぼ全て抜けるのではないかと思います。

なお、池内の生物への対応です。従来池内に見られた鯉などの姿は確認できず、ほぼ渇水期に学内に棲むハクビシンなどの餌食になってしまったものと推測されますが、捕獲されたアカミミガメなどのカメは、殺処分されることなくそれを受け入れてくれる施設で対応してくれることになりました。[写真上段より水の抜きとられたひょうたん池、作業視察をされる中野学長、泥浚い作業の様子(2023年8月23日)]

5. 今後の課題

ひょうたん池の清掃は無事終了し、泥や枯れ枝がなくなり綺麗に整備された池の姿が出現しました。ひょうたん池は底や周りが厚いコンクリートでできていることから、雨が降ると直ぐに雨水が溜まる池のようです。そのため、雨により十分な量の水が供給され、溜まった雨水を浸透井戸

に流すことにより、池の水の循環が可能であると考え、そのように設計されたもののようにも思われます。しかし、なかなかそのようにはいかないようで、夏場になると池の水面は緑色になり、青粉が発生するようになります。水の循環がなく、淀むことにより生ずる現象です。効率的な池内の水循環の方法を考える必要があるようです。

また、池内には周囲の樹木から枯れ枝や枯れ葉が常に落ちてくるため、定期的な回収が必要になります。池の築山の法面から土や小石も落ちてきます。これも同じことです。池の周囲の土留め対策を講じながら、定期的に清掃を行う必要があります、そのためのアカマツ基金に準ずるような資金面での手当も含め、具体的なひょうたん池メンテナンスのためのプログラムを大学と一緒に考えていく必要があります。

このように、ひょうたん池を中心にした自然景観の維持については、いくつかの解決をしていかなければならない問題が今回の清掃作業を通じて浮き彫りになりました。一つ一つの問題をしっかりと検討し、大学に協力しながら、解決を図っていきたいと考えます。枯枝や枯れ葉などを自分達の手で年に一度は除くというようなことも大切でしょう。

今回のひょうたん池の清掃作業の経緯、作業、今後の課題等について振り返って見ました。日々の地道な努力により、大学の緑や景観は保全され守られています。会員の皆様のご理解とご支援を引き続きお願いする次第です。



[写真:最近のヒョウタン池の状況(2023年9月23日)]

一橋植樹会 会長 飯塚義則(昭50経)